

今日のメッセージのタイトルは「神の有り難い恵み」とわざわざ漢字を用いたものにいたしました。それには理由があります。日常生活の中で、私達は例えば有益な話を聞いた時に「ありがたいお話を聞きました」といった言い方をします。確かに今日話をしたいことは有益な話をしたいと思っただけなのですが役に立つとか立たないとかではなくて、このことがまさにあり得ないことである。考えられないことであるということを表したいと考えて漢字を用いました。それを最初に頭に留めていただければと思います。

1) イエス・キリストによる新しい時代を生きる

先ず最初に注目したいのは、21節の「しかし今や」です。この言葉は、「しかし今や、全てにおいて新しいことが始まっている」ということを語っており、20節までと21節以降とは全く違うことが語られていることを示しています。20節までの所に語られていたのは、人間の罪とそれに対する神の怒りでした。しかもそれは、一部の人間が罪を犯しており、その人たちに対して神が怒っているというのではなくて、全ての者が、ということは神の民であるユダヤ人も含めて、一人の例外もなく皆罪の下にあり、神の前で正しい者は一人もいない、ということです。3章20節までの所にはそのことが徹底的に語られています。21節の「しかし今や」は、人間の罪と神の怒りの現実の中に、今や全く新しいことが始まっていることを告げています。その新しいこととは、神の義が示されたことです。神の義とは神にとって当たり前の世界であり、罪ある私たち人間にとっては到達しようのないすべてにおいて完全な世界です。イエス・キリストによって神の義が示されたことによって、罪の下にあり、神の怒りの下にある私たち人間の世界に、今や決定的に新しいことが始まり、新しい時代が来ているというのです。本人がどれほど意識するしないにかかわらず救われてクリスチャンになってからというもの全く新しい中を私たちは歩んでいるのです。この手紙は至る所でこのことを語っています。例えば5章11節、8章1節などです。これらの箇所が共通して語っていることは「今や、罪に対する神の怒りの時は過ぎ去り、義とされ救いにあずかって新しく生きる時が始まっている」ということです。パウロはこの手紙全体を通して、今やイエス・キリストによって新しい時が始まっているのだから、そのことを信じて新しく生きていきなさいと語りかけているのです。

2) 忘れてはならない罪の現実

このようにローマ人への手紙は、主イエス・キリストの十字架の死による贖いによって罪を赦され、神の義を与えられて新しく生きることができるといふ新しい時が今や始まっている、という福音、救いの知らせを語っています。ただそこで気をつけなければならないことがあります。それは、示されている新しさ、救いの知らせだけに目を奪われて、かつてのことを忘れてしまっただけではないということです。3章20節までのところには、人間の罪の現実が語られています。少し取り上げると 1:21「彼らは神を知っているながら、神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その鈍い心は暗くなったのです。」1:29,30,31「彼らは、あらゆる不義、悪、貪欲、悪意に満ち、ねたみ、殺意、争い、欺き、悪巧みにまみれています。また彼らは陰口を言い、人を中傷し、神を憎み、人を侮り、高ぶり、大言壮語し、悪事を企み、親に逆らい、浅はかで、不誠実で、情け知らずで、無慈悲です。」それが罪に支配され、神の怒りの下にある、私たちの現実です。その現実に対して今や新しいことが起っており、イエス・キリス

トによって神の義が示されたので、それを信じて新しく生きることができる、と告げています。しかしこの新しさが告げられたことによって、罪に支配され、神の怒りの下にある現実の姿を見つめることをしなくなってしまう、それはもう過ぎ去った過去のこと、消え去った過去のように思ってしまうとしたら、それは全くの間違いだということです。むしろパウロがこの手紙の最初の部分、具体的には1章18節から3章20節までのところで、延々と、人間の罪と神の怒りについて、しかも全ての人がある罪の下にあることをしつこいほどに語ってきたのは、信じて神の義によって生かされていく新しい時においても、この人間の罪の現実を忘れてしまってはならない、そのことが常に見つめられていなければならない、ということをお教えるためです。私たちはこの世にあっては赦され続ける罪人ですから昔はそんなこともあった。でも今はそんなこととは無縁というわけにはいかないのです。

ただ、罪赦され救われ新しい時を生きていると言いつつも、以前の人間の罪の現実をいつまでも忘れてはならないというのであれば救われている喜びは起こらないではないかと言う声があるかもしれません。しかしそれはパウロの意図するところではありません。救い主をどのような方と見るのかを考えてみますといくら想像力がたくましい人であってもこの私のために大切ないのちを与える人とはどういった人かについてはよく分からないと思います。もしその人が自分に何か借りがあるなら少しは理解できるでしょう。「あの人には大変お世話になっている。だから自分も何かお返しをしなければ」というわけです。キリストによってもたらされた神の義はそうではありません。いつも自分のことばかり考え、迷惑をかけ、世話になっているこの自分のためにキリストはいのち、つまりご自分のすべてを捧げ切って下さったのです。私たちとしてはそれは当惑するばかりです。それがどれほど感謝で憐れみ深いものであるかについては自己中心に物事を理解しやすい私たちにとってはなかなか深く感じとれないところがあります。それこそ中には「私のためにそんなことまでしていただくには及びません」とありがた迷惑のようという人だっているかもしれません。こういったことは罪の赦しと救いを人間的な見地あるいは義理と人情といった視点に立って考えているからこそ思いつくことだと言えます。

3) 神は恵みとまことをもって人間を見ておられる。

キリストによる贖いのみ業によって神の義が示されたことをみことばに立って考えてみる、それはつまり神のみこころに立って考えてみるとどうなるのでしょうか？ このことを理解するための鍵となるのが、25節で語られている、「神は忍耐をもって、これまで犯されてきた罪を見逃してこられた」ということばです。今まで、即ちキリストの贖いのみ業がなされるまで、人間が犯してきた罪を、神は忍耐をもって見逃してこられたということです。私たちが意識しようとしまいと私たちの罪を神様はすべて知っておられます。私たちは何事も起こらないのは神様が気づいていないか神様が認めているということなのだ自分に都合の良いように解釈しがちです。実はそれこそが人間の罪が抱えている弱点あるいは問題です。神は人間の犯している罪に対して当然下されるべき怒り、罰を、忍耐して差し控えておられているのだとみことばは語ります。しかしそのように神が人間の罪に対する怒りや罰を差し控えておられる間は、神の義、神の正しさは示されません。神の義、神の正しさは罪への罰が下されることによって初めて示されたこととなります。罰があって正しさは明確になりますし、罰がなければ正しさもないということとなります。そしてそこで行われるべき罪人への裁き、罰は、本来それを受けなければならないはずの私たちの上ではなくて、神の独り子イエス・キリストの上で下されたのです。主イエスが、罪人に対する神の怒りと裁きを、私たちに代って引き受け、私たちの罪を償う供え物として十字架にかかって

死んで下さったのです。このことによって神の義、正しさが示され、確立したのです。つまりキリストにおいて神の義が示され、確立したのです。それと同時に、本来義ではない、死ぬべき罪人である私たちが赦されて義とされるという救いも実現したのです。

4) 神の与えた恵みは有り難い

基本中の基本のようなことですが「罪人である私たちが赦され、救われるというのは本来ありえないことです。」なぜなら、罪人が赦され、救われるということは神の義、神の正しさが否定されてしまうことになるからです。現代の私たちの思考は「イエス・キリストの十字架によって罪赦される」とそこからスタートしますが実はその前に「神の前で罪人は断じて赦されることはない」ということを確認しておく必要があります。私たちはこの社会において、いわゆる巨悪がのさばり、罰せられることもなく富み栄えているのを見ると、こんなのおかしい、これでは正義が踏みにじられている、と憤ります。しかしそれと同じように私たちが罪を赦され、義とされ救われるというのはおかしいし矛盾することであり、神の正義が踏みにじられているようなことなのです。しかし神は、ご自分の義を、神の正義を打ち立てつつ、同時に罪ある私たちを赦し、義とし、救って下さるという驚くべきみ業を行って下さいました。その驚くべきみ業は、神の独り子主イエス・キリストが、私たちの罪を全て背負って十字架にかかって死んで下さったことによって実現したのです。私たちは、神がご自身の独り子の命を犠牲にして下さったという、驚くべき、文字通り有り難い、あり得ないような恵みによって、罪を赦され、義とされて、新しく生きることができるのです。私の罪に対する神の怒り、罰はイエス・キリストにすべて向けられたのです。ですからその救いを受けた私たちとしては、自分の罪を見つめないで、罪など犯していないような顔をし、他人事のようにしらばっくれて生きるようなことは出来ません。自分の罪を他人事のようにとらえて、脳天気には赦されて感謝、感謝とはいかないのです。まさに罪に支配されている自分の現実のただ中で、自分の罪深さにおののきながらも、しかし主イエスの十字架の死によって与えられた赦しの恵みを大胆に信じて、その恵みに感謝と喜びとをもって応えていく、そういう新しい歩みへと踏み出していくのです。ですから私たちが救いの恵みをどれくらい感謝できるかは自らの罪深さをどれほど認識し、認めているかにかかっていると言えます。

今日は礼拝において聖餐にあずかります。聖餐は、主イエスが私たち罪人のために、肉を裂き血を流して贖いの業を成し遂げて下さった、その驚くべき、まことに有り難い恵みを信じて洗礼を受け、キリストと結ばれて生きている者たちが、その有り難い恵みをパンと杯によって体全体で味わい、体験しつつ、神の義によって生かされていくために備えられているものです。ですから聖餐にあずかる者は、主イエスが死ななければ赦され得ないほど深い自分の罪を今一度はっきりと覚えさせられると共に、その罪のただ中に与えられている神の救いの恵みにあずかり、ただ神によって義とされて生きる新しい命を大胆に生きてゆくのです。祈ります。